



## 説教要旨「ひとつひとつ手放す歩み」

使徒言行録9章32～43節

収穫感謝日である今日、神様から与えられた恵みによってわたしたちが育てられていることを覚え、感謝をささげたいと思います。しかし、神様が与えて下さるものの中には、素直に喜べる恵みばかりではなく、時につらく、苦しい、できれば与えてほしくなかったと思うような事柄もあります。

ここに登場するアイネアには病を、タビタには死を、神様はそれぞれお与えになりました。ペトロを介してアイネアの病は癒され、死んでいたタビタは生き返りましたが、この時は癒やされ、あるいは生き返ったこの二人も、いつかは死んだはずです。結局は死を迎える者たちを、癒したり生き返らせたりすることは、一時的な気休めであり、死を少々先延ばしにしかただけのことにも思えます。その本当のところの意味は、人間には決してわかるはずもないものなのかも知れません。

わたしたちは、自分の人生が思い通りにいかないとき、願っていた望みが実現していかないとき、欲求不満がたまっていきます。健康に生きたいと願うところで病気に悩まされ、こんな人生を歩みたいと願うところで、子どもの都合に振り回されたり、親の介護で時間を取られたりするのです。しかし、わたしたちの目に良いと思えることも、悪いと思えることも、それらはすべて、神から与えられたものではなかったでしょうか。「主は与え、主は奪う」(ヨブ記 1:21) お方なのです。

神様は病も死をも支配されておられ、その上でわたしたちに病や死を、必要なものとして与えられるのです。その御心はどうも計り知れません。それでもわたしたちは、この神を信頼していいのです。なぜなら、神様はその独り子を私たちのために地上に送られ、十字架の苦しみを味あわせられたからです。それほどまでにわたしたちを愛して下さっている神様が、愛するわたしたちをただ苦しめるためだけに、病や死を与えるはずなどないのです。

わたしたちの命は、死で終わらず、その先へと続いていきます。そこには、「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」(黙示録 21:4) のです。